

倫理学と応用倫理学

Ethics and Applied Ethics

高橋 隆雄

生命倫理学、医療倫理学は、環境倫理学、情報倫理学、ビジネス倫理学、技術者倫理学、脳神経倫理学などとともに、応用倫理学に属するといわれている。

「応用倫理学(applied ethics)」という名称を私は好まない。というのは、いわゆる応用倫理学とされる上述の学が、従来の倫理学のたんなる「応用」にすぎないと思われる危険があるからである。つまり、従来の倫理学は、現代のさまざまな領域で生じる倫理的諸問題に応えるだけの十分な力量を備えていて、われわれがすべきことは、それらを実際に現場で起きている問題に応用することであると考える危険である。

倫理学の方法や諸原理とは、もともと確固として存在しているものではなく、その多くは現実との格闘の中から見出され鍛えられてきたものである。プラトンは自分の政治哲学を实践するためにシュラクサイに赴き、奴隷に売られる経験をした。ロックやホッブスも身の危険を感じて国外への逃亡を企てた。現実の具体的な問題と取り組む応用倫理学は、その意味で、まさに倫理的思索を行っているといえる。

私は、以上のようなことを授業や著作で何度も主張してきた。すなわち、応用倫理学は従来の倫理学理論や原理のたんなる応用・適用ではなく、現場の倫理的諸問題への真摯な取り組みから、新しい倫理学原理や方法論が見出されても来るのである。このことは、もちろん生命倫理学にも妥当する。

生命倫理学は現在、応用倫理学の中でももっとも注目を集めている分野である。その生命倫理学は、従来の倫理学のたんなる応用に留まっではない。生命倫理学の基本原則といえば、ビーチャムとチルドレスが挙げた4原理が有名である。自律尊重、無危害、善行、正義がそれである。それら4つの原理は、特定の倫理学理論を前提にしていない。たとえば、自律尊重原理の中の「自律」であるが、愚行権を認めるようなミルの自由論に基づく場合と、理性により自己支配を自由とするカントに基づくのでは、同じ自律尊重でも内容は大きく異なることになる。

ビーチャムとチルドレスの挙げた原理は、アメリカの医療実践から抽出したものであるが、その原理の根拠となる倫理学理論は、ミルでもカントでも功利主義でも構わない。それゆえ、それら4原理は異なる歴史的背景や宗教のもとでも共通に当てはまるものとなる。そのような普遍性は、原理の理論的あるいは宗教的根拠づけを空欄にすることによって得られたものなのである。別の視点から見れば、どのような内容の原理にするかはそれぞれの国に任されている。また、それについて論じる研究者間で意見が違う場合も多々あるだろう。

すなわち、生命倫理学の原理とは、まず、従来の倫理学理論の具体化・応用化ではなく、実践の中から抽出されたものである。さらに、その原理は特定の倫理学理論を前提にせず、いかなる理論が相応しいかについては、当事者たちに任されている。

このように、生命倫理学はたんなる応用倫理学ではない。その原理は、アメリカの医療実践から抽象され普遍化された原理であるが、その他に、医療や生命科学の実践から引き出される原理はないだろうか。ビーチャムとチルドレスの原理は、判断能力がある大人が主たる対象であるため、ヒト胚や胎児、実験動物などに関する問題を扱いがたい。そこで、人間の尊厳の尊重や SOL（人間の生命の神聖性）、功利の原理などが有効な原理として注目されることになる。

ただし、4原理とそれらの原理は、すでに存在するカントやミル、功利主義等の倫理学理論やキリスト教の教義を前提にしているのだから、実践の中から浮かび上がってくる新しい原理とはいえない。

そのような新しい理論や原理にふさわしいのは、ケアの理論であろう。

メイヤロフやギリガンの著作刊行以来、ケアは具体的な看護や介護、教育、カウンセリングの行為という次元を超えて、一つの理論へと結実してきた。

「ケア」は具体的な個々の行為を指すだけでなく、一般的に、ケアということを目指すようになったのである。ケアの理論は、人間観と倫理的思考の二つの点で特徴的な理論である。すなわち、第一には、平等に権利を有して独立自尊の自律や自由を標榜する人間観に代わり、傷つきやすい存在として人間を捉え、人間どうしの関係や結びつきを重視し、そこに本来の自由を見出すような人間観である。そして第二には、抽象的で普遍的な倫理学理論を平等に適用する倫理的思考に代わり、具体的な脈絡において、個々の人間の個性を念頭に置いて、人間関係の維持や修復を重視する倫理的思考のあり方である。

こうしたケアの理論は、近代的人間観や近代的な倫理的思考とは別のものであるため、哲学者や倫理学者の着目するところとなった。

ケアの理論やケアの特徴が注目されるに至った背景には、近代的な自由主義や個人主義の欠陥が顕著になってきたことがある。今の時代自体がケア的なものを重視する方向へ進んできている。生命倫理学

はそのような傾向の中心にあって、ケア概念を理論と実践の往復運動の中で鍛えることで、時代の重要なキーワードとすることに貢献してきた。応用倫理学は倫理学のたんなる応用・適用ではなく、応用倫理学の中から倫理学の新しい理論や原理が見出されることがあると初めに述べた。ケアの理論と原理の登場は、そのような新しい理論、原理といえるかもしれない。

ただし、ここでもう少し考えてみよう。医療はもともと疾病や障害のある人を対象にしており、人間が傷つきやすい存在であることは、医療にとって自明なことでもある。また、患者への接し方は、本来の医療であれば個々の症状に応じたものであるべきなのである。その意味で、ケア的な考え方は、医療にとってもともと軽視できないものである。そのように医療と密接に結びついた考え方が、本格的に時代を代表する理論のひとつとして登場してきたのが今の時代である。

現代において生命倫理の実践から抽出される原理や理論である「ケア」は、古くからの医療実践中に潜在していたといえる。それは生命倫理学に登場した新しい理論、原理に見えて、実は医療という実践がはるか以前から育んできた考えなのである。

応用倫理学が実践の中から従来にはない全く新しい理論や原理を見出すかどうかは定かでないが、諸実践のうちに潜在していた考えを、理論や原理として明示化し時代の要請に答えるものとすることに貢献するといえるだろう。

(たかはし たかお 熊本大学)